

#### 四

先生の父君、省亭画伯を、私達は大先生といつか言つてゐた。大先生の画堂は浅草三筋町にあつた。毎晩九時頃になると、大先生の車が三筋町から戻つて來た。すると、先生は机を離れて必ず二階へ挨拶に行かれるのだつたが、それよりも早く先生の前に酒盃のある時には、後ろの襖をなかば開けて、玄關から奥へ通られる大先生に挨拶をされるのだつた。当時先生は禁酒……といふことになつてゐたからだつた。

大先生が帰られると、時折、大先生の所望で露女さんの三味線が二階から聞こえることがあつた。何か知らないが恐ろしく手の込んだものが浮きたつやうに鳴るのを私は面白いものだと思つて聴いた。河東節の三味線といふものを解らぬながら聴いた晩もあつた。

#### 五

浜町へ行けば終電車といふ事が常例になりだした。が、どうかした拍子にはその電車をも失ふ折があつた。すると、先生は、自動車をとつて送つて下さつた。自動車ならばといふので、また落着いて話がはづむ。とう／＼運転手に催促されて慌て、坐を起つ。自動車は途中宮城の広場を抜けるのだつたが、そこから見ると二重橋の辺り、深夜の城の眺めといふものは非常に、ものだと度々私はさう思つた。自動車は麴町で苔雨君を下ろし、四谷でよしを君を下ろし、青山の練兵場を横切つて御所前で私を下ろし、樹人君も加はつた折には更に渋谷へ走つた。

由來、伺ふ都度あまり丁寧な遇されるのには、私達みんな恐

縮してゐたのだつたが、殊にこの自動車には恐縮した。だから何時でも電車を失ふまいと気を付けてゐても、不思議に帰り端を失ふのだつた。時の数を打つて廻つて來る夜番の拍子木の音を聴きながら、まだ大丈夫だと言はれると、またもう少しといふ氣になつて坐り直してしまふ。だから、あまり自動車が度重なる時には、私達は、もう危ないと言はれるのを無理に外へ出た。すると、先生は案じながら、日本橋俱樂部の横町まで電車の有る無しを確かめながら送つて下さるのだつたが、私達は大丈夫だと言つて駆けだしてしまふ。そして電車のやはりなくなつた町を時々歩いた。十二時すぎた中を銀座まで出ると、其処の年の市の後仕舞の商人と一緒に、荷車を下げたカンテラの灯を見ながら歩いた事もあつた。こんな事も当時はさして苦痛に思はなかつた。

果して、次に先生に逢ふと、前夜の電車を訊かれるのだつた。「い、え、ありました。丁度赤電に間に合ひまして……。」私達は辛うじて先生の前をごまかした。

#### 六

私達の寒燈会がやがて先生に知れると、時折はそれを流觴居で聞く事もあつた。多く、紀元節とか雛の節句とかいったやうな日で、そんな折は珍らしい人が加はる事があつた。また遠方から珍らしい俳人が見えたりすると、急に招ばれて私達が出掛けて行つて句を作る事も時折あつた。そんな事で同座した人に、松香鴻村君、故石橋三千里君、遠藤葦城君、楠目橙黄子君、菊地大我君、等を記憶する。